

『戦場のチューリップ〜あの花が咲くまでに〜』

作・演出 HARUTAサーカス



登場人物

咲（さき）…主人公の少女 13歳

真（まこと）…咲の兄 18歳

但田 正造（ただ しょうぞう）…咲たちの父 チューリップ農家 ㉮歳

但田 礼（ただ れい）…正造の妻 42歳

角子（すみこ）…咲の親友 14歳

茂男（しげお）…咲の親友 14歳

雪（ゆき）…茂男の妹 8歳

N…村のご神木の大銀杏

千代…角子の家のお手伝い 19歳

富（とみ）…千代の先輩女中 25歳

五十嵐長介…角子の父 村の名士 40代

五十嵐セイ…角子の母 30代

竹岡 信代（たけおか のぶよ）…咲たちの学校の教師 27歳

荒俣校長…咲たちの学校の校長 40〜50代

村田巡査（村田猛／たけし）…村の駐在 20代

一郎…下級生 12歳

次郎…一郎の弟 9歳

向島テツ…新任のおばさん先生

さつき…疎開してきた少女

憲兵 A

憲兵 B

入院中のおばあちゃん

先輩看護婦

小笠原・・・引き上げてきた兵士

老婆の咲

真子・・・咲の孫 19歳

昭和16年、初夏。富山県砺波地方。咲き誇るチューリップ畑。

「さあ、もうちよつとだ。みんながんばれよ」

「がんばってるよー」

「咲、無理すんな。真、そっちはどうだ？」

「ああ、もう終わるよ」

「よつし、そこを終えたら飯にするかあ」

おにぎりを頬張る3人。

「うまあい！母ちゃんの握り飯は、お天道様だね」

「(笑)どうして母ちゃんの握り飯がお天道様なんだ？」

「うーんと、えっと、あつたかくなるよ」

「もうこんなに冷えちまつてるぞ」

「ちがうよ。あつたまるのは、こころだよ。兄ちゃんは馬鹿だなあ」

「(笑)そうだな、兄ちゃんは馬鹿だな」

「なんだよ、父さんまで」

「でも大好きよ、兄ちゃん」

「え、あ、ああ」

「(笑)照れてやがる。咲、父ちゃんはどうか？」

「父ちゃんもだーい好き」

「(笑)それはそれは、きのどくな」

楽しげに食事続ける3人。

「きのどくな。ここ富山の言葉で、ありがとうという意味です。『自分の為に、こんなに苦勞をしていただいて、あなたに気の毒な思いをさせてしまったね』といったところでしょうか」

「父さん、今日刈り取った分は、明日の朝市に持っていくの？」

「ああ、父ちゃんのチューリップ、町じゃすごい人気だぞ」

「大正時代、水野豊造(ぶんぞう)の手によつて始まった富山県砺波地方(となみ)のチューリップ栽培は、昭和になり人々の暮らしを助けました。農閑期は出稼ぎに行くしかなかった男達は、豊造とともに球根作りの組合を作り、昨年の昭和15年には本場オランダから輸入した種球(たねきゅう)を栽培し、アメリカに輸出するまでに成長を遂げたのです」

「明日、お前も行ってみるか？」

「やった。じゃあ、そのまま学校にもどるよ」

「兄ちゃん、帰っちゃうの？」

「またすぐ来るさ。その間、しっかりこいつらの面倒みておいてくれよ」

「うん、わかった」

N 「チューリップ農家を営む正造の長男・真18歳。新潟の親戚の家に寄宿し、新潟県立青年学校教員養成所に通い、農業を学ぶ学生です。正造のチューリップ畑が忙しいときを見計らって、兄・真が帰ってきてくれるのが、咲には楽しみで仕方ないでした」

咲 「ああ！天道虫！星がひとつ、ふたつ、みつっ・・・わ、逃げた」

N 「そして妹の咲、13歳。生まれてすぐ原因不明の高熱にみまわれました。命は助かりましたが、少しだけ、問題を抱えました」

角子 「咲ー！何してんのよー！？」

咲 「角ちゃんだ、今行くよー」

走っていく咲。

真 「おい！咲！まだ刈り取りが」

正造 「いい、いい。さあ、もうひと踏ん張りするか」

真 「うん」

角子のところに走ってくる咲。

「角ちゃんー」

咲 「咲ー！何してるのよ！約束忘れちゃったの？」

角子 「約束？してたっけ？」

「つもー！先月号の少女画報の占いだよ。〃2月生まれの貴方は〃ってあたしのことだけど、〃5月27日、好きな人の名前を書いた紙ヒコウキを高い場所から一番星に飛ばすとよし〃ってあれ！今日一緒に、願掛けする場所探してくれるっていったでしよー！？」

咲 「そうか、そうだった・・・かな」

N 「同級生の角子は14歳、背が高くて少しおませです。角子の家は、この辺りでも有名な旧家で、迷子になってしまうほどの大きな家に住んでいます」

角子 「あーどうしよう、もうすぐ一番星出ちゃう。咲、この村で一番高い場所ってどこ？うーん、火の見櫓じゃ味気ないし、どうしよ、咲！」

咲 「あー、いいところ知ってるよ。来て、角ちゃん」

角子 「あ、咲！待ってよ」

走っていく咲と角子。

咲 「（荒い息）ハハハ、角ちゃん。さ、登ろ」

角子 「えー、これ、大銀杏じゃない。ちよつと咲！・・・」神木でしょ、登っていいのかしら・・・」

咲 「角ちゃん、早く。一番星が出ちゃうよ」

角子 「ん・・・とりあえず行くか」

大銀杏の巨木に登っていく二人。

角子 「咲く、そろそろいいんじゃない？わたし、高いところは苦手なんだ……。うわぁ……。すごい景色……。」

眼下に広がる雄大な景色。

咲 「きれいでしょ。大銀杏の神様、今日もお邪魔します。一番の友達の角ちゃんです」

「知っています、咲も角子も生まれたときから。わたしがこの地に根を下ろして千年ほどが経ちました。いまでは村のご神木として、大切にしています。だけど、大切にされすぎてさびしい思いもしました。昔は子供達がたくさん、わたしに登って遊んでいたから。今は咲が唯一の話し相手です」

角子 「すてきねえ……。あの光ってる向こうは海なのかしら？」

咲 「あっちはね、お天道様の家よ」

角子 「お天道様の家？」

「うん。もうちよっと、じっと待ってたら、あの真っ赤なお天道様が、あっちに帰っていくの。ほら角ちゃん、見て。だんだん、あのキラキラも真っ赤になって、それから一番星が出てきて」

角子 「わ！一番星！忘れてた！ヒコウキ、わたしの紙ヒコウキは！？……。あった、あった！」

咲 「あ！一番星発見！今だ、角ちゃん！がんばれ！」

「わ、もう出たの？よし行くよ、えい！」

角子 「行け……。あ、あれ？まっさかさまに……。落ちちゃったね……。」

咲 「（荒い息）！高い……。何がおかしいのよ、咲！」

「ごめん、角ちゃん……。〈笑〉」

角子 「もう！咲なんてしらない」

「〈笑〉」

N 「なぜか、とても気の合う二人です」

正造の家。夕餉の支度をする母・礼。

礼 「へえ、咲がそんなことを」

真 「うん。母ちゃんの握り飯は、お天道様だあって言っつて、俺達よりたくさん食べてた」

礼 「（笑）あたしがお天道様なら、あの子はチューリップだね。あの子の笑顔が一番さ」

咲が帰ってくる。

咲 「ただいまー」

礼 「こら咲、暗くなる前に帰ってこなくちゃだめでしょう。ご飯抜きにするよ」

咲 「えー、ごめんなさい！許して、お腹へって死んじゃうよ」

礼 「（笑）それじゃ、寝る前に肩でも叩いてもらおうかね」

咲 「えー、またー？いいけど母ちゃんの肩、大銀杏様の根っこみたいにぶっとくて」

礼 「なんだって！？」

正造 「お、騒々しいな？さ、飯にしよう」
咲 「はーい」

N 「幸せに大きさがあるとするなら、このくらいの幸せがちょうど良いのではないのでしょうか。でも、そんな幸せを壊す悪夢のような足音が、静かに近づいてきていたのです。」
角子の家の廊下を走るお手伝いの千代と角子。

千代 「角子さん、待ちなさい！待ちなさいったら！」

角子 「ごめんなさい、許してー！」

千代 「とにかく、それを、返しなさい！返しなさいったら」

角子 「もう少し貸しておいてよ！次の願掛けをしなくちゃいけないんだから。先月号のは大失敗だったのよ」

千代 「お気持ちはわかりますけど、そんな雑誌を読むのは、角子さんにはまだ早いです！奥様に見つかったらあたしが怒られます」

角子 「大丈夫よ、自分の部屋で隠れてみるから。心配なら納戸か倉に蠟燭を持って、キャ！」

角子の母・セイが現れる。

セイ 「納戸と倉がどうしましたか？」

千代 「奥様・・・」

角子 「お母様・・・」

セイ 「千代、もうじきお客様がお集まりですよ。支度は出来ているの？」

千代 「はい！ただいますぐ！」

セイ 「角子、あなたも支度なさい。今日は豊造さんもお越しになるからちゃんとご挨拶するのよ。あら？後ろに何を持っているの？」

角子 「いえ、なんでもありません！わたし、着替えてきます」

急いで部屋に戻っていく角子。

角子 「豊造さんまでいらっしゃるなんて、何かあったのかしら」

しばらく後、玄関の見送りの声。三々五々帰っていくチューリップ組合の人たち。

対して、五十嵐家の客間。皆が帰り、残った五十嵐長介と正造。

正造 「長介さん・・・豊造さんの話は、本当だろうか？」

長介 「わからん・・・しかしヨーロッパの戦争のせいで、オランダの種球が手に入りにくくなっているのは本当だ」

正造 「いくらなんでも日本まで戦争にはならんだろう？」

長介 「いや、わからんぞ。きな臭い噂は、あつちからこつちから流れてくる。アメリカは本気で日本を締め付けにかかってきているからなあ」

正造 「うーん・・・アメリカに球根の輸入を完全に禁止されたら、どうしたもんか」

長介 「とにかく今は、情勢を見守るしかあんめえ」

正造 「・・・」

次の日、大銀杏の上。

角子 「ほんと、昨日はあぶなかったわ。千代に借りた少女画報、もう少しでお母様に見つかる
ところだったわ」

咲 「だけどそんなに、願掛け？したい相手って誰なの？」

角子 「うふ、聞きたい？」

咲 「別に」

角子 「ちよっと！聞きなさいよ。まったくロマンのない人ね」

咲 「ロマン？おいしいの？それ」

角子 「ばっ！もういいわ。どれどれ、2月生まれのアナタはとと・・・」

茂男 「おい！そんなところで何してんだよ！？ご神木に登ったらばちが当たるぞ」

咲 「あー、茂男！大丈夫、登っておいでよ」

角子 「あー、もう、さらにロマンのかけらも無いのが増えちゃった」

登ってきた茂男。

「よいしょっと、はあ着いた。へー、すごい眺めだなあ。しかし本当にばち当たらねえか？」

咲 「大丈夫だよ。大銀杏の神様、茂男です。えーと」

角子 「村一番の臆病者です」

茂男 「なんだと！がりがりのつぼの鉛筆女！」

角子 「ふん」

茂男 「ふん！だけど、気持ちいいところだなあ。花の刈り取りの前だったら、もつとも6

つとすごかっただろうなあ」

咲 「そうなんだよ、茂男！そりゃあ綺麗なんだから。来年も楽しみだなあ」

茂男 「・・・そんな時また、ここに登ってよ、一緒にチューリップ、見ようぜ・・・」

咲 「え？なんか言った？」

茂男 「なんでもねえ、なんでもねえ！いやー、綺麗だなあ、ははは」

カラス 「カー（あほー）」

N 「その年、正造たちのチューリップの球根は、アメリカへの輸出がかなわぬまま、富山湾

の倉庫に山積みされていました。そして、わたしの葉も全て落ちた冬12月、日本は戦争という暗雲に飲み込まれていきました」

教室。

信代 「今日は授業を取りやめて、みんなに聞いてほしい話があります」

雪 「あたしお話好きー」

茂男 「雪、静かにしろ」

信代 「いいわ、茂男君。今日はみんなも、どんどん発言して」

角子 「先生・・・戦争のこと？」

「うん、そうです・・・みんなもすでに知っていると思いますが、日本は、世界と戦争を
始めました」

生徒達 「・・・」

信代

「なんだか実感わかないよね。こんな田舎だし、急に何かが変わったわけでもないし……。だけど、戦争は人と人が殺しあう、本当に恐ろしいものです。先生は、どんな理由があっても、絶対に戦争はいけないことなんだと」

ガラツつと教室の戸が開き、校長の荒俣が入ってくる。

荒俣

「竹岡先生！生徒達になんと話をしているんですか！？」

信代

「校長先生。わたしは生徒達に、戦争の真の姿を」

荒俣

「いいから！とにかく一旦、校長室に来なさい！」

信代

「……わかりました」

荒俣

「みんなは静かに、自習していなさい！いいね！さ、先生」

咲

「先生」

信代

「大丈夫よ、咲ちゃん。行ってくるわね」

茂男

「先生！」

雪

「えーん、えーん〈泣〉」

教室を出て行く信代。

お使いに出ているセイと千代。そこに自転車で走ってくる駐在の村田。

千代

「うー寒い……」

セイ

「寒いと思うから寒いんですよ。ほら、背筋をしゃんと伸ばして歩きなさい」

千代

「はい……あら、駐在さん」

セイ

「ずいぶん慌てて。あの人のお父様は、どんなことがあっても取り乱したりはしなかったのに。村田さん、どうされたの？」

村田

「（荒い息）あ、どうも五十嵐の奥様。ああ、千代さんも」

セイ

「なにかあったの？そんなに慌てて」

村田

「そ、それが、奥様！た、たいへんなことが」

千代

「取り乱してるわあ」

セイ

「落ち着きなさい。どうしたの？」

村田

「それが……奥様だから申し上げますが、くれぐれも他言無用で」

セイ

「わかりました。それで？」

村田

「はい……憲兵が……憲兵がこの村に来るといいう知らせが来しました。それで、本官に村を案内せよという命令で」

千代

「憲兵？」

セイ

「なにをしに来るのですか？こんな田舎の寒村に」

村田

「それはまだ……すみません、本官はこれから憲兵隊を迎える準備をしなくてはいいけませんのでこれで」

走り去る村田。

千代

「何でしょうね……なんだか怖い」

セイ

「……」

校長室。

荒俣 「竹岡先生、冷静にお考えなさい。父上と同じ轍を踏むようなことになったら、あなたの母上に申し訳がない」

信代 「このことは父も母も関係ありません。わたしはわたし個人として」

荒俣 「だとしても、あなたの考えを子供達に押し付けるのはやめなさい」

信代 「押し付けてなど・・・わたしは子供達に、戦争の無意味さを伝えたいんです」

荒俣 「同じことです。わたしには子供達を守る義務がある。あなたのしようとしている事は、子供達を危険にさらすことになりかねない。それだけは断じて許すことは出来ない・・・わかりましたね」

信代 「・・・」

N 「それからすぐ、正造たちのチューリップは、敵国オランダの花だという理由で、栽培が禁じられました」

第2話

昭和17年、2月。雪に埋まった咲の村。
吹雪の中に立つ咲。

礼 咲——咲！どこにいるの？咲！

咲 咲！ここだよ、母ちゃん

礼 咲！？あー、良かった。なんだってそんなところに突っ立ってるんだい？母ちゃん、肝が冷えちゃったよ

咲 何か聞こえるの。朝からずっと

礼 なんだって？・・・母ちゃんには何も聞こえないけどねえ

咲 ほら、また

礼 吹雪の音だろ？とにかく中にお入り。風邪ひいちゃうよ

正造 「演習の音だろう」

咲 「父ちゃん。演習ってなあに？」

正造 「ああ、鉄砲撃ったり、大砲撃ったりな。戦の練習だ」

咲 「父ちゃん、戦争のせいで、今年はチューリップ作れないって本当？」

正造 「ん？ん・・・大丈夫だ。お前は心配すんな。さ、中に入ろう」

咲 「うん」

N 「日本海を挟んで、すぐそこは大国ロシアです。雪中行軍を想定した演習が、雪に埋もれた咲の村の山でも行われていました。ただならぬ音と空気に、猿やキツネ達、冬眠中の熊さえ、引越しの準備を始めました」

角子の家の台所。先輩女中の富（とみ）と千代に角子。

千代 「お富姉さん、こっち支度できました。お食事、もうお運びしますか？」

富 「ありがとう。まだいいわ。お話が終わった頃に、奥様から指図があるはずだから」

角子 「最近よく村の人たち来るわね」

「そうですね」

「やっぱり、チューリップのこと？」

「さあ、ほかにもいろいろあるようですしねえ」

「ふーん」

「だけど、新聞では毎日、日本軍の連戦連勝って書いてあるでしょう。やっぱり、お嫁に行くなら軍人さんかなあ？」

「千代、お嬢さんがいるのよ」

「あたしはやだなあ。結婚しても配属地が遠かったりしたら、あんまり会えないと寂しいもの」

「お嬢さんまでなんですか」

「それは言える。じゃあやっぱり、この村の人？えー！？」

「ほら、駐在の村田さんは？噂じゃあの人、千代さんのこと憎からず思ってるらしいわよ」

「いやですよ、あんな唐変木！」

「だったら誰がいいの？まさか千代さん、もう好いてる人がいるの？」

「えー、いないです、いないです！」

「うそよー、白状しなさいな！」

「えー、恥ずかしいわあ、まあ、いいなって思うのは」

「思うのは？」

「咲ちゃんのお兄さん・・・かな」

「え・・・真さん？」

「・・・わー、あたし何言ってるんだろ。うそよ、忘れて下さい！」

「ほら、千代！いい加減にしなさい。ちよつと客間の様子見てきてちょうだいよ。そろそろなら、お酒も爛つけなけりやいけないから」

「はーい、行ってきます」

「まったく千代は・・・あら、お嬢さん？どうかされました」

「え？別に」

「？」

客間。10数名の村の会議。

「それじゃあ、長介さんのほうで、春までの出稼ぎの口は手配してもらえるってことで、腹積もりしておいていいんだらうか？」

「うん、なんとかしよう」

「すまねえなあ・・・何から何まで」

「金は、またチューリップで稼いで返してくれりやいい。気にするな」

「長介さん！そういうことはその、あんまり大きな声で言わないでくださいよ」

「なんだ、駐在さんはあつちの見方か？」

「あつちとか、こつちとかそういう問題じゃ」

「お国の事情で戦争おっぱじめておいて、いきなり敵国の花だからチューリップの栽培をやめろだなんて言われたって、誰ひとり納得なんか出来っこねえだろ。チューリップには何の罪もねえんだ」

「お気持ちちはわかりますが、本官にはどうもしょうが・・・」

ため息をつく村の人々。

「（ため息）じゃあ、どうあっても考えは変えられないと？」

長介
信代
「申し訳ありません」

「竹岡先生！戦局は日々、苛烈を極めてきている。国の検閲もそれに呼応して、厳しさを増してきた。あなたが戦争反対を声高に唱え続け、逮捕でもされた日には、当局のこの村に対する心象は取り返しのない傷を負うんです。わかりますか？」

信代
セイ
「はい、それはわかっています。でもわたしは・・・」

「なら、出て行ってもらいましょう」

長介
セイ
「セイ・・・」

「竹岡先生。この村から出て行ってくださいな。今後、この戦争がどういう経過をたどって行くのかは誰にもわかりません。もしかしたら、あなたの主張が正しいことが証明される日がくるかもしれない。でも今、この村は決して問題を起こすわけにはいかないんです」

長介
セイ
「だが、おいそれと首に出来るものでもなからう。生活のこともあるわけだし」

「ですから、ご自分の意思で、この村から出て行っていたくんです。当座の生活費は私共で用立てます」

信代
セイ
「子供達をほうり出して、村を出て行くことなんて」

「春までに」

信代
セイ
「え？」

「春までに、お互いに準備を整えましょう。教師をやめろなどとは言っていません。新学期が始まる前に、この村の学校から消えていただければ結構です」

信代
セイ
「そんな・・・」

「あなた一人のために、子供たちと村の未来を脅かさないでちょうだい。豊造さんたちのこれまでの苦労をあなたはわかっているの？」

10

信代
セイ
「それはわかっています、ですが」

「この話はこれで終わりです。さ、みなさんお疲れでしょ。簡単なものしかありませんけど、今食事を運ばせますから。千代！これ、千代！」

千代
「はい、ただいま！」

N
「竹岡先生の父上は小説家でした。プロレタリア文学の新旗手と謳われ、社会の変革をめ

ざし、権力と真つ向から激しく対峙していききました。若者たちからは絶大な指示を受けましたが、反戦運動に身を投じるようになると、軍当局から睨まれ、ついには危険思想家として投獄されてしまったのです。そして獄中でわずらった労咳（ろうがい）が原因で、志半ば他界しました。享年45歳、竹岡信代15歳のことでした」

数日後、子供達が雪合戦に興じているところに、通りかかった信代。

茂男
角子
「そりゃー！戦艦富士の加農砲（カノンほう）、受けてみろー」

「ふん、それならこっちは速射砲よ！それ、それ、それー！咲、雪、どんどん雪玉作って」

一郎
雪
「ぶーん！おりゃ、空中爆撃だ！」

「・・・（泣）うあーん！」

咲
次郎
「雪、だいじようぶ！一郎、ひどいよ、雪を狙うなんて」

「へん、泣き虫雪やーい！」

茂男
角子
「雪、もう泣くな」

「一郎、誤りな！次郎、お前も」

二郎 「なんでもおいらまで」

一郎 「ごめーん」

角子 「こら一郎！真面目に・・・あ、先生」

咲 「あ、本当だ、先生だ。先生――！」

みんな 「先生――！」

信代に駆け寄る生徒達。

咲 「先生、どうしたの？どこか行くの？」

信代 「うん、ちよつとね。みんなは雪合戦？楽しそうね」

一郎 「俺は空軍の操縦士だよ。ぶーん」

信代 「そう」

角子 「一郎！・・・先生は戦争嫌いなんだから」

一郎 「あ、いつけねえ」

信代 「いいのよ、角子さん・・・みんなせつかく会えたから、お楽しみ中悪いんだけど、ちよつと聞いてくれる？」

雪 「いいよ。雪、お話好きー」

信代 「ありがとう、雪ちゃん・・・みんな、この間はごめんね。先生、自分の考えをみんなに押し付けてた」

角子 「戦争のこと？」

「うん。先生は今も戦争が大嫌いだけど、それは一人一人が決めればいいことだって、先生気が付いたの。これから先、それぞれが自分の考えをしつかり持つことが大事なんだって、先生思いました」

「自分の考えって、なあに？」

咲 「そうだなあ例えば、このことだけは譲れないとか、これだけは誰がなんと言おうと守つていこうとか、そんな風に、強く大切な思いを持てる人になってほしいなって・・・ちよつと難しいかな？」

角子 「ううん、難しいけどなんとなくわかるよ。なんだか、こころがあつたかくなるよ」

「自分らしく、つてことかな？」

茂男 「先生、俺！・・・守りたいものあるんだ・・・俺、守れるかなあ？」

信代 「守れるよ、きつと。ゆつくり考えればいいわよ。みんなの人生はまだまだ長いんだから」

一郎 「じゃあ、雪合戦のつづきやろうぜ！先生もやろうよ」

次郎 「やろうやろう！先生はおいら達のほうに」

雪 「ずるい！先生は女だからこつち！」

信代 「(笑) いいわ、やりましょうか」

みんな 「わーい！」

再開される雪合戦。

N 「寒さもいくらか和らいだ4月の始業式、咲たちが学校に来てみると竹岡先生の姿はありませんでした」

向島 「今日からみなさんを担任することになりました、向島テツといいます。先生は見た目は少し恐そうですが、中身はすごく恐いです。戦地で兵隊さんたちは頑張っています。それに負けないよう、ビシビシと行きますからね。わかりましたか？」

生徒たち

「はい……」

向島

「声が小さい！わかりましたね！？」

生徒たち

「はい！」

帰り道。

咲

「角ちゃん、竹岡先生、どこ行っちゃったの？」

角子

「よくはわからないけど、東京で『活動』をするって言って、昨日村を出て行ったみたい」

咲

「活動？なんの？」

角子

「知らないよ。私だって昨日突然、千代さんに聞いたんだもの」

咲

「活動……それって、先生が守りたいものなのかな」

角子

「さあ……」

N 「雪解けとともに、村には出稼ぎに出ていた男達が帰ってきました。田植えの季節がやっ

てきます」

咲

「父ちゃん、お帰りー！」

正造

「おう、咲、今帰ったぞ！しばらく見ない間にでかくなったなあ」

礼

「いやだよ、馬鹿じゃないかねこの人は、本当に（笑）。たったの2ヶ月でどれだけ育つ
っていうんだい、チューリップじゃあるまいし」

正造

「（笑）そりゃそうか」

咲

「父ちゃん、おみやげは？」

正造

「おう、忘れるところだった……咲、礼……こいつを見てくれ」

咲

「何？父ちゃん……わっ！」

礼

「あんた、これは……」

正造

「うん。悪いことだとは承知してるが、富山の倉庫から助け出してきた」

咲

「チューリップだ！チューリップの球根だ！」

礼

「だけど、あんた、見つかったらどうなっちゃうんだい？軍の命令に背いて、あんたが捕
まったりでもしたら」

正造

「うまくやるさ。とにかくこのままじゃ、せつかくみんなで作り上げてきた砺波の球根が
根絶やしになっちゃう。なんとか、栽培を再開できるまで、こいつらを守っていかなけ
りゃならない」

咲

「父ちゃん！かっこいい！咲も、咲もチューリップ守るよ」

正造

「咲……きのどくな」

N 「正造は戦争によって富山のチューリップが途絶えてしまうことに、我慢が出来ませんで
した」

正造

「さてしかし、秋の植え付けまでどこで球根を保管しておくかな」

礼

「そうね、風通しがよくて涼しい場所じゃないといけないけど、これだけの量を吊るして
おいたら、すぐに誰かにばれちゃうよ」

正造

「ああ、村のものは信用できても、人の口には戸は立てられんからなあ。回りまわって軍
に知られないとも限らない。そうになったら、本当に再開の道は閉ざされるだろう」

咲

「咲、いいとこ知ってる。風通しがよくて涼しくて、とつても気持ちいいとこ。きつと球
根も気に入るよ」

正造 「本当か？咲」
咲 「うん！父ちゃん、着いてきて」

歩き出す咲。

咲 「ここよ、父ちゃん」
正造 「こりゃ、お前、大銀杏じゃないか」
咲 「うん。咲が大銀杏の神様に頼んであげるから大丈夫、安心して。こっちだよ父ちゃん」
正造 「おい、咲、ちよっと」

樹上。

咲 「さあ、どう？風通しもいいし、夏でも涼しいよ」
正造 「そうか、たしかにここなら誰も登ってこないなあ。球根の保管場所としては最高かもしれないな」
咲 「でしょ？・・・大銀杏の神様、今日もお邪魔します。紹介します、咲の父ちゃんです。ほら、父ちゃんもちゃんと挨拶して」
正造 「え？あ、ああ・・・えー、いつも咲がお世話になっています。ご紹介に預かりました、咲の父親で但田正造と申します。生まれて初めて、あなた様に登ったわけですが」
咲 「父ちゃん、もういいよ」
正造 「おお、そうか」
咲 「今日は大銀杏の神様にお願いがあつてきました」

「お願い？」

咲 「今まで父ちゃんや村の人が、一生懸命に作ってきたチューリップが戦争のせいで作れなくなっちゃいました。だけど父ちゃんは、チューリップたちがかわいそうで、助けて守ってあげることになりました。咲もチューリップたちが好きだから、父ちゃんと一緒に守ってあげたいです。だから、チューリップの球根をここに隠させてください。お願いします、大銀杏の神様」
正造 「・・・お願いします」
咲 「さて、大銀杏の神様も許してくれたから、球根たちを網に小分けしてどんどん吊るして」
正造 「わかった。ところで・・・ご神木に登って、ばち当たらねえか？」
咲 「ふっ（笑）、大丈夫よ」
正造 「そうか、よかった（笑）」

第3話

N 「昭和19年、初夏。激しさを増した戦争は、図らずも咲の村をにぎやかにしていました。都会からの疎開です。17歳になる咲と年を同じくする女学生は、やはりどこか違った雰囲気でしたが、すぐに仲良くなれるのも、この年頃の特権でしょうか」

放課後の教室。終業の鐘の音。下校する子供達のざわめき。

さつき 「とてもいい所ね、富山って。なんかほっとするわ」

咲 「それはよかったね、さ、さ」

さつき 「さつきよ」

咲 「あ、さつきちゃん、（うんうん）」

さつき 「（笑）。それに咲さんも、話してるとほっとする」

咲 「え？ありがとう」

さつき 「だけど」

咲 「だけど？」

「うん。わたし、師範学校に進学して学校の先生になりたいの。この村はすてきな所なんだけど、それが心に引っかかっていて。父から急に、この村の親戚の家に疎開するよう言われた夜は、わたし泣いちゃった」

角子が教室に入ってくる。

角子 「あれ？咲、まだいたんだ。さつきさんも」

さつき 「ねえ、角子さん」

角子 「なに？」

「角子さんは夢って、ある？」

角子 「夢？うーん、そうねえ、あるようなないような」

咲 「角ちゃん夢あるの？ずるい、いつの間に」

角子 「何がずるいのよ。さつきさんは？なにかあるの？」

咲 「さつきちゃんは先生になるんだって」

帰り道の3人。

角子 「そうね。この村には上の学校がないから」

さつき 「教師になる夢はあきらめてはいないけど、戦争さえなかったらって、考えてしまうのよ

ね」

咲 「大丈夫よ、さつきちゃん。少しぐらいゆつくり歩いても、行き先さえしつかり分かつて

いれば、必ずたどり着けるよ。ね、角ちゃん」

さつき 「ありがとう、咲さん」

角子 「そうね、きっと大丈夫よ。咲、たまにはいいこと言うじゃない」

咲 「（笑）兄ちゃんが教えてくれたんだ」

さつき 「お兄さんがいるの？咲さん」

咲 「うん。新潟で畑の勉強してるの」

さつき 「へえ、新潟で。そうか、東京じゃなくても学校はあるのよね」

咲 「今度また帰ってくるって、手紙が来てたよ。楽しみだなあ。角ちゃんどうしたの？顔赤

いよ」

角子 「ん？べつに」

咲の家前。

真 「ただいま。だれもいないの？咲？父さん？」

咲 「兄ちゃん！」

真 「よう、咲。ただいま」

咲

「兄ちゃん！！」

兄に飛びついていく咲。

咲の家の夕食。

咲

「びっくりしたよ、帰ってきたら兄ちゃんがいるんだもの」

礼

「ほんとだよ、今日帰ってくるって知ってたらご馳走用意して待ってたのに」

真

「ごめんごめん。・・・父さんに話もあつてさ」

礼

「話ってなんだい？」

真

「いや、いいんだ。そんなに急がないし。明日の夜にでもゆっくり話すよ」

礼

「それにしても遅いね」

真

「寄合かい？」

礼

「ああ、長介さんところ」

五十嵐家。

長介

「猛（たけし）、ゆうてる意味がようわからん、はつきり言え」

村田

「つまり、戦況の激化と取締りの強化と比例して、反戦活動家の過激化は如何ともしがたい状態にまで悪化してしまつたわけです！」

正造

「駐在、落ち着け！要点だけを言え、要点だけを」

村田

「だから！・・・（泣）・・・竹岡先生が・・・」

長介

「竹岡・・・先生？」

正造

「2年前に村を出た・・・竹岡先生か？」

村田

「（泣）・・・先生が・・・人を殺めたそうです」

長介

「なんだって！？」

正造

「そんな、あの竹岡先生が・・・そんな馬鹿なこと」

村田

「嘘ではありません・・・詳しいことはよくわかりませんが、もし、この村に現れたら直ちに逮捕、報告せよとの命令がありました・・・」

セイ

「なんてこと」

長介

「（うなり声）・・・」

セイ

「戻れるわけがありませんよ、この村に。戻れるわけが・・・」

次の日。山中の獣道をかきわけ進む咲と真。

真

「おい、咲！あ、いてて・・・本当にこつちでいいのか？俺に見せたいものつてなんなんだよ」

咲

「それは着いてからのお楽しみ。もうちょつとだよ、がんばって兄ちゃん（笑）」

藪を抜け開けた場所に出る。

「着いたー！」

「ふー、助かった。それで俺に見せたいものつていったい・・・！」

「ふふふ」

「咲・・・これはいったい・・・」

真

咲 「すごいでしょ。咲のチューリップたちだよ、兄ちゃん」

「敵国の花だとして、軍により栽培を禁止されていたチューリップでしたが、正造と咲は、持ち帰った球根を密かに山の中に植えつけていました。春から夏に花を咲かせ、秋に花を摘むことで球根は大きくなっていくからです」

咲 真 「そうか・・・父さんが富山湾の倉庫から」

「助け出してきたんだよ。父ちゃん、チューリップたちがかわいそうで、どうしても守りたくてここに秘密のチューリップ畑を作ったの。父ちゃんは誰にも言っちゃだめだって、兄ちゃんにも・・・だけどあたし、兄ちゃんには見てもらいたくて、ずっと、だから」

真 咲 「わかったよ、咲・・・それにしても、やっぱりきれいだな、チューリップ」
「うん」

真 咲 「咲・・・守ってくれよ、このチューリップたちを」

咲 真 「え？うん・・・でも、兄ちゃんも一緒に守ってよ」

真 咲 「俺は・・・」

咲 真 「兄ちゃん？」

真 咲 「わかった。俺も一緒に守るよ」

咲 真 「本当？約束だよ！」

真 咲 「ああ、約束だ」

咲 真 「やった！やっぱり兄ちゃんだよ！・・・あ、いけない！母ちゃんに手伝い頼まれてたんだ！」

真 咲 「そりゃいけないな。急いで帰ろう」

角子の家前。

真 千代 「ごめんください。すみません、ごめんください」

「はいはい・・・あら！真さんじゃないですか！？帰ってらしたんですか？どうしたんですか？今日は・・・真さんがいらつしやるなんて珍しい・・・わたしに会いきたなんてことはあるわけないし、あー馬鹿馬鹿！わたしったら何言ってるの！？もうやだー・・・それで、御用は？」

真 千代 「（苦笑）角子さんは、いらつしやいますか？」

真 千代 「角子さん？」

川原。

角子 「どうしたんですか？急に。びっくりしました。真さんが家に来るなんて初めてでしょ？」

真 角子 「そうだね」

真 角子 「何か、わたしに話が？」

真 角子 「角ちゃん」

真 角子 「・・・はい」

真 角子 「咲を・・・よろしく頼みます」

真 角子 「え？」

「俺・・・出征することになった。しばらく帰れなくなる。だから、君に咲のことを」
「でも真さん、学生さんじゃない？それなのに、出征って・・・」

「戦争は年々激しさを増し、ついには出征を猶予されていた二十歳以上の学生をも戦地に向かわせました。学徒出陣です」

真 「頼む、角ちゃん・・・俺、あいつのことが心配で。俺がいなくなったら、あいつどうな

っちゃうんだろうって考えると」

角子 「いなくなるだなんて！・・・縁起でもないこと言わないで」

真 「・・・帰ってくるよ・・・何があっても・・・だからそれまで、咲を頼む。この通りだ」

角子 「真さん・・・わかったわ。その代わり約束して。必ず帰ってくるって」

真 「約束する」

角子 「うらやましいな」

真 「え？」

角子 「ううん。そんなに思ってくれるお兄さんがいて、咲はしあわせ者ね」

角子の家。帰ってきた角子にまわりつく千代。

千代

「あ、角子さん、お帰りなさい！ねえ、真さん何のようだったんですか？まさかまさか、わたし宛に手紙預かったりはしてないですよ？あははは、ねえ教えて下さいよ、角子さんってば、ねえ」

自分の部屋に飛び込み障子をぴしやりと閉める角子。

千代 「なによ、教えてくれてもいいじゃない、水臭いわねえ・・・(ぶつぶつ)」

角子 「(号泣)」

「へ？角子さん？どうかしましたか？角子さん！」

角子の号泣が続く。

次の日の朝。

礼 「(泣きながら) 気をつけてね」

正造 「出征前にもう一度、帰ってこれそうか？」

真 「うん、帰ってくるよ。咲には」

正造 「大丈夫だ、俺から話しておく」

真 「よろしく頼みます」

正造 「それから山の畑のことだが・・・知らなかったことにしておけ。なにかあつて迷惑かけたくはない」

真 「・・・わかった」

咲 「兄ちゃん！」

真 「咲」

咲 「(荒い息) 兄ちゃん、はい、これ」

真 「これ・・・球根」

咲 「うん、持ってて兄ちゃん。約束のおまもり」

正造 「おい、咲」

真 「ありがとう。もらってくよ」

咲

「うん！」

新潟に戻っていく真の後姿を見つめる3人。

正造

「かならず・・・帰ってこいよ」

角子の家。大慌てで駆け込んでくる村田巡査。

村田

「(荒い息) 大変だ！長介さん、長介さんいらつしやいますか！？」

富

「あら、村田さん・・・どうされたのですか？お顔が真っ青よ」

村田

「あ、富さん！長介さんは？いつらしやるなら呼んでください！お願いします」

富

「旦那様は今日、正造さんたちと町まで出かけます」

村田

「そうか・・・まいったな」

セイ

「村田さん？どうかしましたか？」

村田

「ああ奥様・・・実は・・・竹岡、竹岡信代がこの村に向かったという情報が入りました」

セイ

「・・・たしかですか？」

村田

「はい・・・昨夜、富山駅で発見されたのですが、逮捕の寸前、捜査員を振り切って逃走

したそうです」

セイ

「・・・そうですか」

村田

「山狩りの準備をしておくように言われまして、長介さんに相談に参った次第です」

セイ

「・・・わかりました。そちらは私のほうで準備させます。あなたは仕事に戻りなさい」

村田

「・・・はい。では、よろしくお願いします。失礼します」

富

「竹岡信代って・・・あの教師だった？」

セイ

「大勢人が来ます。炊き出しの準備を始めてちょうだい。それから千代に言つて、村にい

る男衆を呼んできてもらつて。頼みましたよ」

富

「・・・はい」

山の中。藪をこぐ音と息遣い。

信代

「(荒い息) 痛っ！・・・痛い・・・(歩き出す)」

藪を抜けると、目の前にチューリップ畑。

信代

「(荒い息)・・・・・・チューリップ？」

次の日の朝。チューリップ畑にくる咲。

咲

「さいた、さいた、チューリップのはなが、ならんだならんだ、あかしろき・・・あれ？誰か寝てる・・・ん？あのー、こんなところで寝てたら風邪ひくよ。ねえ、だいじょう・・・！先生？竹岡先生！」

飛び立つ鳥達の羽音。

「そうか、このチューリップは咲ちゃんが植えたのね。驚いたわ、山の中に突然、こんな

綺麗な・・・あの世かと思った」

「あの世って？だけど咲のほうが驚いたよ！人が寝てるし、それが先生なんだから・・・でも先生、なんでここにいるの？先生は東京で運動をしてるって、角ちゃん言ってたのに」

信代 「(笑)そうだよ、驚くよね。そうよ、運動してたのよ。だけど、先生、失敗しちゃった」

咲 「失敗？じゃあ、守れなかったの？大事なものの」

信代 「・・・うん。みんなには偉そうに言ってたのに・・・ごめんね」

「そうか・・・でも簡単にあきらめちゃいけないって、父ちゃんがいつも言ってるよ。先生はもうだめ？はらぺこ？」

信代 「はらぺこ？」

咲 「うん、人間ははらぺこだと頑張れないんだって。そうだ、すぐそこに山ビワの木があるの！咲、採ってきてあげる！」

信代 「あ、咲ちゃん！いいのよ、咲ちゃん・・・(微笑)」

ビワを採りにいく咲。

咲 「だめだよ！こつち来ちゃ！だめだってば！」

憲兵A 「どけ！邪魔をするな！」

咲 「だめだよ！だめだよ！」

憲兵B 「どこの娘だ、お前は！？ここで何をしている！？」

咲 「ダメー！」

憲兵A 「！なんだこれは！？貴様！栽培を禁止されているチューリップではないか！？」

憲兵B 「ん！？誰かいます・・・竹岡・・・被疑者発見！」

村田 「竹岡先生！」

憲兵A 「逮捕——村田巡査、逮捕だ！」

村田 「は、はい！（泣）」

咲 「いやー！」

響き渡る笛の音と怒声。

「力尽きていた竹岡信代は、抵抗することもなく逮捕されました。完全黙秘を続けていましたが、村に戻った理由を問われるとこう言っていたそうです。『もう一度だけ、子供達の顔が見たかった』と。命令に背いてチューリップを栽培していた正造は、町から戻ってくると、待ち構えていた憲兵に逮捕されましたが、数日後釈放されました。しかし、山の中のチューリップ畑は、軍の手によってすでに跡形も無く消えていたのです」

角子の家。

セイ 「話とはなんですか？角子」

角子 「はい・・・わたし、新潟の看護学校に行きたいんです」

セイ 「看護学校？どうしたんです？急に」

角子 「・・・お願いします！わたしを、新潟の看護学校に行かせてください」

セイ 「新潟って・・・一人でどうやって？」

角子 「看護学校は全寮制です。わたしだけここでこうしている訳にはいかないんです！お願いします！お母様！わたしを、新潟にやってください。お願いします！・・・早く行かな

いと……早く……(泣)
「角子……」

N 「角子の決心は固く、十日後、父・長介に連れられ、新潟に向け旅立っていきました」

第4話

南方戦線のジャングルの中。飛び交う砲弾の爆音と怒声。

真 「(荒い息) 大丈夫か？小笠原」

小笠原 「(荒い息) ああ、大丈夫だ……お前は？」

真 「大丈夫だ……なんとかこのまま森の奥まで逃げよう」

小笠原 「逃げる？た、戦わないのか！？」

真 「どう考えても、もうこの戦争に勝ち目はない……それに俺達には、ろくに銃の弾もないんだぞ」

小笠原 「しかし……」

真 「こんなところで死ぬわけにはいかないんだ」

小笠原 「但田……」

真 「行こう。砲撃が近づいてきた」

歩き出す二人。

N 「昭和20年1月。アメリカ軍はルソン島に上陸し、フィリピン、マレー半島、ボルネオ島など日本の占領下にあった南の島々を次々に奪還していきました。2月から3月にかけて行われた硫黄島の戦いでは、両軍合わせて5万人の死者を出したのです」

校庭で薪をする咲たち。

茂男 「あー寒い寒い……早く焼けねえかなあ」

咲 「(笑)わたし、焼き芋って初めて」

咲 「うそ！？東京じゃ、おやつなんて食べないの？」

咲 「食べるけれど、沢田屋の羊羹とか、島津園の甘納豆とか」

茂男 「へえー、なんだかお大臣だな、食ったことねえけど」

咲 「兄ちゃんにも食べさせてあげたいなあ、甘納豆」

咲 「なにか連絡はないの？」

咲 「うん……暮に手紙が来たけどそれっきり……なんか舌嚙んじやいそうな名前の遠い南の島に行くことになったって書いてあったけど」

茂男 「そうか……でも大丈夫だよ、真さんなら」

咲 「そうよ、大丈夫よ。きつと元気に帰ってくるわ」

咲 「……うん！そうだね」

茂男 「お、そろそろいいんじゃないか……わ、あっちちち！」

咲 「茂男さん大丈夫！？」

咲 「(笑) 茂男のあわてんぼ」

茂男 「うるせえ、でも美味えぞ（笑）」
さつき 「ほんとう？」

焼き芋を頬張りながら、笑い合う三人。

ジャングルの奥。月夜。

小笠原 「但田・・・但田」

真 「ああ、生きてるよ」

小笠原 「どうやら攻撃は止まったようだな」

真 「ああ・・・今日は何日だったけな」

小笠原 「わからん・・・それより、水も底をついた。なんとかしなけりや」

真 「（ひどく咳き込む）」

小笠原 「おい、但田！大丈夫か・・・お前、ひどい汗・・・すごい熱じゃないか！？」

真 「小笠原・・・なにか書くものをくれないか？」

小笠原 「なに言ってるんだ、お前！くそつ、マラリアか？」

真 「頼む。妹が誕生日なんだ。手紙を書きたい」

小笠原 「馬鹿やろう！日本に帰ってから、直接おめでとうって言ってやればいいだろう」

真 「わかってる・・・だけど、頼む。書くものを貸してくれ・・・頼む」

小笠原 「・・・ほら」

真 「わるいな・・・小笠原、月が綺麗だな」

小笠原 「え？・・・本当だ・・・俺達、なんでこんな所にいるんだろう」

見知らぬ獣の声が、夜のジャングルに響き渡る。

富山駅。8月一日。汽車に乗り込む長介とセイ。

長介 「セイ、急げ！汽車が出る！」

セイ 「はいはい、すみません・・・はあ、間に合いましたね」

長介 「何をいつまでもグズグズしてるんだ」

セイ 「すみません、でも角子が好きなんです寿司が手に入ったんですよ」

長介 「それを待っていたのか」

セイ 「はい。高岡の作次郎さんが、角子に会うならどうしても持つて行けつて、慌てて用意してくれたんですよ」

長介 「そうか、それは角子も喜ぶな。しかし今日も暑いな、喉が渴いてしかたない」

セイ 「新潟まではどのくらいかかりますかね」

長介 「そうだな、5，6時間で着ければいいが・・・ん！空襲警報だ」

鳴り響く空襲警報と戦闘機の音。避難を叫ぶ駅員の声と、逃げはじめる人々の声。

長介 「いかん、降りるぞ！ほらセイ、何をしてるんだ！」

セイ 「だって、ああ、ます寿司が」

長介 「そんなものはいいい！早く来なさい！」

セイ 「あ、はい！」

爆撃を受ける富山駅。

セイ 「キヤー！」

長介 「うあー！・・・セイ！大丈夫か！」

セイ 「あなた！」

N 「昭和20年8月1日。アメリカ軍によって、2日間にわたり行われた富山大空襲は地方都市への空襲としては最大の被害をもたらしました。市街地の99パーセント以上を焼き尽くし、死傷者合わせて1万人以上、被災者は10万人を越えました。そして、その数日後、広島と長崎に落とされた原子爆弾によって、この戦争は終わりを告げたのでした」

五十嵐邸。

村田 「大変だー！大変だー！」

千代 「まあ、村田さん！相変わらず取り乱してるわねえ！？どうなさったの？」

村田 「(荒い息) あ、千代さん！終わったよ！終わったんだよ！」

千代 「終わったって、いったい何が終わったの？」

村田 「(ごくん) 驚かないでよ、戦争が、戦争が終わったんだよ！」

千代 「あらそう、戦争がね、って嘘でしょう！？」

村田 「本当だよ、千代さん！本当に戦争が終わったんだよ！」

千代 「・・・やったー！やったわ！よかった！終わったのね！やったー！」

村田 「お、おい、千代さん！困るよ、本官はまだ勤務中で、その、あの」

千代 「いけない、こうしちゃいられないわ！みんなに知らせなけりや！奥様！旦那様！戦争が、戦争がおわりましたよー！」

村田 「ち、千代さん・・・」

N 「人々は、まるで憑き物が落ちたように、戦争の呪縛から解き放たれました。笑いたいくに笑い、いきたい所に行き、歌いたい歌を歌う。そんなささいな事の尊さに、いまやっと気が付いたかのようでした。

そして、1年後」

昭和21年夏。新潟の病院。

角子 「はい、包帯の交換終わりましたよ。山田さん、お薬、ちゃんと飲んでくださいね」

ばあちゃん 「ありがとございます。だけど兵隊さんがたくさん死んでしまつて、こんな老いぼれには、

薬なんでもつたいのうて、もつたいのうて」

角子 「おばあちゃん」

先輩看護婦 「あ、五十嵐さん、ここにいたのね。あなたにお客様よ」

角子 「あたしに？誰ですか？」

先輩看護婦 「さあ。でも男の人。なかなかの美男子よ」

角子 「あ」

先輩看護師「五十嵐さん！？（息をつく）おばあちゃん、またわがまま言っていない？」
ばあちゃん「あんたは嫌いじゃ」
先輩看護婦「つぐ」

病室を飛び出していく角子。

走ってくる角子。

角子 「（荒い息）・・・？」

小笠原 「五十嵐角子さんですか？」

角子 「は、はい・・・あなたは？」

小笠原 「小笠原といいます。但田君とは同じ部隊で、南方戦線で共に戦ってりました」

角子 「真さんと・・・お疲れ様でした」

小笠原 「これを・・・あなたに渡して欲しいと・・・彼に頼まりました」

角子 「・・・手紙？」

小笠原 「・・・はい」

角子 「・・・ありがとうございました」

手紙朗読／角子（F・O・）と真（F・I・）

「前略 但田咲様 咲、元気かい？兄ちゃんはずごい元気だ。今は遠い南の島で、のんびりと
過ごしています。

早く家に帰りたいけど、もう少し待っていてください。仕事が済んだら、すぐに帰るから。
それまで父ちゃん

と母ちゃんをよろしく頼む。そうだ、咲にもらったチューリップの球根、南の島に植えてい
くよ。こっちは暖

かいから、きつとすぐにたくさん咲くと思う。しばらく会えないけれど、頑張つて、いつか
また一緒に、チュ

ーリップ畑をやろう。 但田真拝」

もう一枚、手紙がある。

真（手紙）「角ちゃん、咲にこの手紙を渡して欲しい。僕は約束を守れそうにない。どうか、咲を守つ
てあげてください。

勝手ばかり言つて本当にすまない。角ちゃん、どうかお元気で。さようなら 真」

角子 「角ちゃん、どうかお元気で。さようなら 真」

角子 「・・・馬鹿やろうー！（号泣）」

ご神木の大銀杏の上。

正造 「（手紙の朗読）咲にもらったチューリップの球根、南の島に植えていくよ。こっちは暖かいから、きつとすぐにたくさん咲くと思う。しばらく会えないけれど、頑張つて、いつか
また一緒に、チューリップ畑をやろう。 但田真」

咲 「そうかぁ・・・大銀杏の神様、兄ちゃん、南の島で元気にやってるって」

正造 「咲・・・」

咲 「父ちゃん」

正造 「ん？なんだ？」

咲 「兄ちゃんが帰ってくるまでに、この畑をチューリップでいっぱいにしようよ。見たこともないような、綺麗な色のチューリップをたくさん」

正造 「・・・そうだな」

咲 「咲、見えるよ。南の島がチューリップでいっぱいになってるの。兄ちゃんが植えた球根が、島中を色んな色に染めてるよ。やっぱ、兄ちゃんはすごいなあ。やっぱ、兄ちゃんだよ！」

正造 「咲・・・」

咲 「父ちゃん、がんばろうね！」

正造 「・・・おう！がんばろうな！」

咲 「兄ちゃん！兄ちゃん！」

正造 「真——！みんなで頑張るからな——！」
いつまでも真を呼び続ける二人。

平成。初夏。大銀杏の前の家の縁側。年老いた咲（80歳）と咲の孫の真子。

咲 「さいた、さいた、チューリップのはなが、ならんだならんだ、あかしろきいろ、どの花みても、きれいだな」

真子 「あら、咲ちゃん、ご機嫌ね」

咲 「おや真子ちゃん、早いね」

真子 「今日は咲ちゃんの傘寿（さんじゅ）のお祝いだから早く帰って来いって、じいちゃんうるさいんだもん」

咲 「（笑）茂男ちゃんはいからずせつかちね」

郵便配達員 「こんにちは、郵便です。咲ばあちゃん、お届け物だよ。庭から入っていいかい？」

真子 「郵便屋さん、ダメよ！」

郵便配達員 「あ、玄関に回ったほうがよかったかな？」

真子 「違うわよ！咲ちゃんは、おばあちゃん扱いされるのが嫌いな」

郵便配達員 「いけね、そうだった、すまんすまん。じゃあ、咲ちゃん、お届け物だよ」

咲 「ありがとう」

去っていく郵便配達員のバイクの音。

真子 「（クスッ）咲ちゃん、開ける？」

咲 「ええ、開けて」

真子 「OK, よいしょっと・・・わお！今年も来た来た。売るほどあるのにね（笑）」

咲 「このチューリップはとくべつ。兄ちゃん、がんばってるわねえ」

真子 「毎年忘れずに、妹に誕生日プレゼントかぁ。いいなあ、あたしもそんなお兄ちゃん欲しかったな」

咲 「（クスッ）だめだめ、兄ちゃんは咲だけのにいちちゃんよ」

真子 「はいはい。あたし母さん手伝ってくる。今日はごちそうよ」

家に入っていく真子。

「(クスッ)・・・ありがとう・・・兄ちゃん」

「あの手紙の翌年から、咲の誕生には差出人不明のチューリップが届くようになりました。茂男と咲は結婚し、私のすぐ隣に家を建て、二人は立派なチューリップ畑を営んでいます。角子はいえ、看護学校を卒業後、更に勉強を重ね、ついには医者になりました。医療一筋に打ち込み、いまでも一人で新潟で暮らしています。咲の両親の正造と礼は、未来を咲たちに託し、順を追うようにして旅立っていきました。

わたしは、あいも変わらずここに立ち、季節の巡るまま、芽吹き、葉を茂らせ、実をつけ、大地に還るのみです。子供達の楽しそうな声が聞こえてきました。わたしは今日も、ここで待つだけです」

おしまい